

故 平沢貞通画伯執念の獄中画展 作品解説

画伯の生涯

小樽で青春時代を過ごした平沢貞通は、中学生のころから画才を発揮し、北海道の広大な自然を微細なタッチで大胆に写実し、明治から大正、昭和の前半にかけて、全国的な画壇において活躍していた。1914年ころの作品群、「昆布乾すアイヌ」、「うろつく不具者」、「黒奴と黒猫」には、大正デモクラシーの反映が見られる。雅号は「大暲」（たいしょう）。

その平沢が、1948（昭和23）年、冤罪・帝銀事件で12人の殺人者として死刑を宣告され、1987年に95歳で獄死するまで、コンクリートの壁と鉄格子に囲まれた狭い独房に閉じ込められた。そのことが、「地平線の画家」とも呼ばれた平沢の肉体と精神にどれほどのストレスとなったか計り知れない。

だが平沢は、妻や娘、支援者などから画材の差し入れを受け、獄中で絵を描き続けた。その絵には、明らかな作風の変化が認められ、いわれなき「冤」を晴らすための執念を感じさせる。雅号は「光彩」（こうさい）。

1950年代後半から1980年代前半に描かれた膨大な作品の多くは、再審請求の後継者であった、故 平沢武彦（旧姓：森川）に残された。

光彩の作品について

美術評論家ヨシダ・ヨシエ氏（2016年亡）は、光彩作品について次のように語っている。「私を何より驚かせたのは多くの風景や人物が、記憶のほのぐらい暗闇から、おびただしく描きだされてゆく、一種凄愴な想像力の力だ。（中略）平沢貞通にとって、人物や壁画までをふくむすべては、望郷の風景であり、それを再現することに圜圀（囚われの身）の闘いがあったのだ。そこに介在する執拗な観照と記憶の作業が圜圀の平沢貞通の武器となったといえないのか。そして、怒りや不安や恐怖や焦燥や、それらをのり超えようとする内面の闘いの痕や、乗り越えた清明な悟りにも似たおだやかな世界や、そうした心のうごきの活写された、かけがえのない、そして無残な内的記録として読むことができる。この類稀な世界が、平沢貞通のいう徹底した観照と、その記憶の再現の速度と、テンペラ画の要請した、そのような技術と通底しながら、閉ざされた暴力下の状況で想像力として、四十年間ゆれうごいていたとしたら、それをどんな無法が圜圀に囲いこむことができるか。平沢貞通をおとし入れたのが、米軍支配下における日本の戦後構造の権力犯罪だとするならば、依然としてその構造に囚われたままだが、その内と外を悶えて駆けめぐる、なまなましい人間の想像力からも、私たちは離れられないでいることを、圜圀の平沢貞通は教えている。」

今回の展示作品

『獄窓の花』 鉄格子を描いた絵は、不当にも刑務当局により宅下げを許されなかったので、平沢の死後遺族に渡された。鉄格子の内側に凜と咲く真っ赤な彼岸花が描かれており、窓の外には写実を乗り越えた明るい色の世界が広がる。死刑執行の恐怖と闘いながらヨシダ・ヨシエ氏の言う「清明な悟り」の表現になっている。鉄格子を描かずに、刑務所の建物をバックに花束を描いたもう一枚の『獄窓の花』もある。

『うずくまる貞通』と名付けられた大作には、雅号の署名がなく印もない。裏には同じ構図の習作が描かれており、光彩にとっては未完成作品であるかもしれない。建物の窓には、明らかに鉄格子が描かれ、その下にうずくまり悩める男が貞通であるとすれば、そばに赤子を抱いて立つ女性は貞通の妻に違いない。

『拘置所の夜景』と『死刑廃止』（書）は、光彩の比較的初期の作品と考えられる。なぜ自分が不条理な冤罪に陥れられたのかを考えれば考えるほど、死刑制度の廃止にたどり着いたのだ。

『雲怒れども富士泰然』 平沢大暲は、好んで富士山を描いていた。この光彩作品には、「囿囿第六百七十一作 富士百景第三十作」と記されている。これも獄中の「清明な悟り」の表現だ。

『猫怒る』 風景画で名を成した平沢が、獄中でこうした動物の姿を描いたこと自体が驚きである。毛の逆立ち具合といい背景の色彩といい、表現の根底にあるものは明らかである。

『白い猫』 猫の白さと背景の色彩との対比は秀逸。

『消えゆく肌』 印章の痕はあるものの雅号はない。この裏には同じ画像を逆にした絵が色濃く描かれており、表はその陰をなぞったかのように少し淡く描かれている。これも、光彩画伯の手法なのかもしれない。

『霞中娘』 色紙に書かれた愛娘の顔、記憶を振り絞ったあげくの表現と見てとれる。「霞中娘」と書いて、カチューシャと読ませるのかもしれない。

『カチューシャ可愛や』 大正時代に流行した映画や歌謡が「カチューシャ」だった。貞通の青春時代であり、文化的アイデンティティーだった。

『黄菊』 これが獄中で描かれたと考えると、一見不思議な絵ということになる。ゴッホではないが、自分がさんざんに描きなれた富士山を描いた絵の手前に菊の花、背景には暗鬱な色を配し、意識としての色彩を立体的に捉えている。

『地獄の華』 自らを地獄（死刑囚）の火炎に焼かれる真っ白な花に例えたとすれば、これもヨシダ・ヨシエ氏の言う「かけがえのない無残」だ。

2018年1月「故平沢貞通画伯執念の獄中画展」主催：帝銀事件再審をめざす会（山際）

〒104-0042 東京都中央区入船1-7-1 中山法律事務所気付（安田）090-1456-1565